



# 白鳳点描

## 「やる気スイッチ」を入れるために

校長 川本 幸則

20年ぐらい前のことだと思います。当時、私は中学校に勤めていました。その時に、先輩教師に聞いたお話です。

その先輩のお子さんは中学生でした。毎朝、登校するお子さんに「今日も頑張っね。」と声を掛けていたとのこと。親からすれば、いろいろな意味で前向きに進んでほしいとの思いから声を掛けていたのでしょう。しかし、この「頑張っね」という言葉が、お子さんを苦しめることになってしまったそうです。

ある日、暗い顔してお子さんが「もう頑張れない。『頑張っね』と毎日言われるけど、何をどう頑張ればよいかわからない。」と伝えてきたそうです。

この話をどうして聞くことになったかは記憶にありませんが、子どもたちへの話し方、特に言葉の選び方について考えさせられました。

頑張っている姿は、きっと様々なイメージがあると思います。親は多様なイメージをもって抽象的な表現で伝えたところ、具体的にイメージしようとした子どもが困ってしまったのでしょう。伝える側がイメージしている「頑張っている姿」が、受け手ではイメージできず苦しい思いをさせてしまったことを先輩は話してくれました。

日本の言葉は一つの言葉で様々な意味をもつものがあり、雰囲気は伝わりますが、具体的なことは伝わりにくいことがあります。また、子どもたちは、言葉で理解するのではなく、イメージで理解することもあるので、イメージしやすい言葉で伝えることが効果的なこともあります。短距離走を指導している方が、子どもに「ビューンと走れ!」と伝えていた場面を思い出します。子どもたちは成長の過程で様々なことを体験し学んでいきます。まだ、成長過程ですので、大人が表現を選んで、子どもたちに伝わるようにしていく必要があります。

先日、尾張旭市青少年推進大会の意見発表で、本校3年の石黒さんが、「努力するとよいことが待っているので、自分で『やる気スイッチ』を入れたい」との内容で発表をしてくれました。私たち大人も、子どもたちが「やる気スイッチ」をONにできるよう、伝えていかなければならないと考えます。

※ 石黒さんの発表は、後ほど市のHPに掲載予定です。

新しい年を迎え、新型コロナウイルス感染の再拡大を心配していましたが、本校では、大きな拡大はみられません。しかし、毎日発表される新規感染者数等は、ピークを過ぎたような感じがしますが、数字を見ると、多くの方が苦しんでいることがわかります。また、市内では、インフルエンザの流行もあり、この2年間の様子とは異なった状況です。

健康であることが豊かな生活の基盤となりますので、油断をせずに生活することが肝要です。学校においても、引き続き感染症への対策を講じながら教育活動を進めています。